

〔駒沢女子大学 研究紀要 第二五号 p 九～二二・二〇〇八〕

# 大島嶺に家もあらましを

—『万葉集』巻二・九一番歌の解釈—

三 田 誠 司

On the word “Oshimamine” in “MANYOSHU”

Seiji MITA

## 一、問題の所在

近江の天津の宮に天の下知らしめす天皇の代天命開別天皇、諡して天智天皇といふ

天皇、鏡王女に賜ふ御歌一首

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島嶺（大島嶺）家もあらましを（2・九二）

右に掲げたのは、『万葉集』巻二相聞の天智天皇の一首。歌は、「あな

たの家だけでも続けて見ていたいものだ。大和にある『大島嶺』に家があればよいのに」という内容。近江国からは「大和」の山を見ることは困難だと思われるが、仮に山背国へ出かけた折の作として見れば「大和なる」とうたうことも不自然ではないだろう。ただし、諸注釈の中には、この歌を難波に都が置かれた孝徳天皇の時代、すなわち、天智天皇の皇太子時代の作ではないかと見る説もある。両説のいずれが正しいかは判断が難しいが、「大和なる大島嶺」の所在が特定できれば、ひとつの手がかりになるであろう。

ところが、この「大島嶺」の所在がよく分からない。賀茂真淵『万

葉考』は、その所在について「大和に島てふ地も有、又島山にあかる橋などよめるもあれど、此嶺はおほつかなし」と述べ、作歌事情と関わらせて「標のまゝにては、近江に遷まして後もこの女王は大和に居給へば、かくよみませしとせん、又なほ後岡本宮にます間の大御歌なれど、標は其御代の凡を挙る例なればしかるか、さらば女王は山辺郡の大和の郷に住給ふをかくよみまし、ならん、かくあらば大島嶺も其あたりに在なるべし」と推定している。作歌時については近江遷都後ともそれ以前とも二案考えられるとし、山の所在に関しては大和国内の山辺郡かとする説である。一方、岸本由豆流『万葉集攷証』は、『日本後紀』大同三年九月戊戌の神泉苑における宴の記事を引いて、平群朝臣賀是麻呂の歌に「いかに吹く風にあればか大島の尾花の末を吹き結びたる」とあることから、「ここによめる於保志万も平群郡なるべし」とする。『万葉集注釈』など以後の注釈書にも『万葉集攷証』の推論は引かれているが、『日本後紀』の文脈によればこの「大島」は神泉苑の中の島山を言うものと思われ、大和国平群郡の「大島」を詠んだものとは断定できない。

一方、固有の地名ではないと見るのが上田秋成『万葉集櫛の杣』で、「大和なる大島嶺とは大和島嶺と云を延して詞章はなす也」と述べている。橘守部『万葉集櫛婦手』も同様に「大倭島根の山に家もあらましものを」と解する。

近代の諸注釈においても、「大島嶺」の所在は不明で、確定を見ない。井上通泰氏『万葉集新考』は、長柄豊崎宮時代に、大和へ一時帰った中大兄が鏡王女の家を見渡せる峠道で、「モシ此峠二住マバ引キ続テ妹

ノ家ヲ見ヨウモノヲ」とうたったものとする。これはうたわれた時代は難波京時代だが、作歌の場所は大和国内であるとする説である。以後、山田孝雄氏『万葉集講義』、武田祐吉氏『万葉集全註釈』、佐佐木信綱氏『評釈万葉集』などは近江時代の作とするが、近年では土屋文明氏『万葉集私注』、『日本古典文学大系 万葉集』、沢瀉久孝氏『万葉集注釈』などのように、難波宮時代と捉える方向の説が多くなっている。

「大島嶺」の所在は、結句の「家もあらましを」の「家」をどのよう捉えるかにも左右される面がある。この「家」については、もともと天皇の家とする説が主流であったが、『万葉集講義』が「若亦旧来の説の如き意とせば、わざわざ大島嶺に家居する如きよりもその隣などに住まむ方よかるべきにあらずや」と述べて以来、鏡王女の家とみる説によるものが多い。嶺の位置と、「家」の解釈の仕方によって先行諸説は千差万別だが、現在では、難波宮から大和との間に見える生駒山系の中の一峰と想定する見方が有力である。

その中であって、注目されるのは渡瀬昌忠氏「鏡皇女―高安山相聞」(『渡瀬昌忠著作集補巻 万葉学交響』)の次のような発言である。

「大島の嶺」は、皇太子のいる難波宮と鏡皇女のある忍坂方面とを結ぶ直線上にあり、その間を高く隔てている高安山と考えられる。記紀万葉では「大島」とは常に海中の大きな島をさし(原本系玉篇の内容と一致する)、「大和なる大島」とは、本来は、柿本人麻呂の「明石の門より大和島見ゆ」(3・255)とうたう「大和島」と同じく、西方海上から見る大和の「大島」で、その「嶺」

は海上に浮かぶ大きな島山のような生駒・葛城の連峰であり、高安山はその中央の一嶺である。

これは、「大島嶺」の所在については、先行の諸説（たとえば『日本古典文学大系 万葉集』には「大島の嶺―奈良県生駒郡と大阪府河内郡との境の山。高安山か。」とある）とさほど変わらないが、「大島嶺」という語の構成について、地名に「嶺」が加わった固有名詞としてではなく、「大和島」などというときの「島」のその「嶺（ね）」なのだと理解する点で、これまでとは異なっている。この「西方海上から見る大和の『大島』」という捉え方は大変に示唆的である。「大島」を地名として、その場所を特定しようとする試みは、方向性として間違っていたのではないだろうか。そこで、「大島嶺」を中心にこの歌をめぐって考察を展開する。

## 二、「ネ」と「ミネ」

現在、この歌の第四句は一般に「大島の嶺に（オホシマノネニ）」と訓まれているが、これは荷田春満『万葉集童蒙抄』による改訓である。古写本はすべて「オホシマミネニ」と訓んでいる。はたして「オホシマノネ」という訓は正しいのであろうか。「オホシマノネ」であれば「オホシマ」という土地の山、あるいは「オホシマ」という名の山ということになるが、古写本の訓「オホシマミネ」が正しければ、別の語構成、すなわち「オホ・シマミネ」あるいは「オホ・シマ・ミネ」である可能性が出てくる。この点、近代の注も無関心ではなく、山田孝雄氏『万葉集講義』に、

按ずるに「ミネ」といふは「ネ」といふ語を単独に用ゐる時に接頭辞「ミ」を加へたるものなるが、之を其の名称を示す語の下に加へて「某ミネ」といふことは古なかりしものと思はる。されど「オホシマミネニ」といふ時は音足らざるのみならず、「シマネ」といふ語に混ぜべし。さればなほ「オホシマノネニ」とよむ方によるべし。

という発言が見える。これは、「オホシマ・ミネ」という語構成を「古なかりしもの」と考え、『万葉集童蒙抄』の改訓を支持する説である。確かに「某ミネ」という例は『万葉集』には見えない。この点において『万葉集講義』の考察に加えるべきものはないように見えるが、「オホシマノネ」と訓む場合、所在が不明という以外にも、問題がある。ひとまず、「某ミネ」という語の繋がりの存否は預けることとし、「ネ」に注目してみよう。

『時代別国語大辞典 上代編』には、「ネ」について、

峯。山の高いところ。ミネとも。ネの多くの用法は、アヒツネ・サガムネのように、地名と結びつくか、アダタラノネ・フジノネのようにノを介して地名と結びついて山名となるかであり、白ネも地名だから、一般的な語と熟合したものは、高峯ぐらいである。単独の用法もいくつかあるが、それはすべて東歌の中にある。万葉のころには、ミネの形が普通だったであろう。

と述べる。関連する「ミネ」「タカネ」という言い方は後に検討するとして、まず、「ネ」について見てゆきたい。右の『時代別国語大辞典 上代編』には、「ネ」単独の用法がすべて「東歌」の中にあることが指

摘されているが、「ネ」のネ」といった複合した用法の用例も、実際には東国の山を指して使用された例が多い。大和を中心とした畿内か、あるいは畿外かという分け方をしてみると、畿内の山を指して「ネ」あるいは「のネ」と呼んだ確例は皆無である。天智天皇の一首が「オホシマのネ」という固有の山の名を詠みこんだ歌であるとする、それが唯一の例ということになる。

古代の語彙について考察するには『万葉集』のほか、『古事記』・『日本書紀』・『風土記』などの文献で確認する必要がある。ただし、今、問題としている「ネ」「ミネ」については、漢字表記で「嶺」「峰」「岑」とあるだけでは「ネ」と訓むべきか、「ミネ」と訓むべきかを決定したい面がある。そこで、一字一音表記の用例があり、音数律から「ネ」「ミネ」を確定しやすい『万葉集』の例を中心に考察するのが適切であろう。そこで、以下の論述においては『万葉集』の例を中心とする。なお、『古事記』には「山」の例が多く、「ネ」「ミネ」と訓ずべき例は見当たらない。『日本書紀』も「山」が多いが、「峰」「嶺」も見える。が、どちらも訓の手がかりはない（注1）。『風土記』も大半は「山」で、「ミネ」「ネ」の例は少ない。ただし、『常陸国風土記』の歌謡に「筑波嶺（都久波尼）」の例がある（注2）。

では、「ネ」の用例について確認して見よう。まず、単独の用例は『時代別国語大辞典 上代編』に指摘するとおり、いずれも「東歌」のものばかりである（なお、以下の万葉歌の書き下し文に限っては、「ネ」と読む時には「嶺」の文字を、「ミネ」と読む時には「峰」の文字を用いることにする。これは、『万葉集』の原文の状況を反映したものである）

なく、判別をつけやすくするための処置である）

ア新田山嶺<sup>に</sup>はつかかな（祢尔波都可奈那）我に寄そりはしなる  
子らしあやに愛しも（14・三四〇八）

イ我が面<sup>おも</sup>の忘れむしだは国はふり嶺<sup>に</sup>に立つ雲を（祢尔多都久毛乎）  
見つつ偲はせ（14・三五一五）

ウ高き嶺<sup>に</sup>に（多可伎祢尔）雲のつくのす我れさへに君につききな

高嶺<sup>たかね</sup>と思ひて（14・三五一四）

一方、地名と熟合した例を見ると、やはり「東歌」が多い。まず「の」を介さないで地名と結びついた例は、

「相模嶺」 一例（14・三三六二）

「会津嶺」 一例（14・三四二六）

「伊香保嶺」 一例（14・三四二一）

「筑波嶺」 十五例（3・三八三、8・一四九七、9・一七五三、9・

一七五四、9・一七五七、9・一七五八、14・

三三五〇、14・三三五一、14・三三八八、14・

三三九〇、14・三三九一、14・三三九二、14・

三三九三、20・四三六七、20・四三六九）

「武蔵嶺」 一例（14・三三六二）

「鹿島嶺」 一例（16・三八八〇）

という状況である。このうち、東国の山でないのは最後の「鹿島嶺」だけである。その「鹿島嶺」は「能登の歌三首」のうちの一首に読み込まれる山なので、やはり畿内の山ではないことが確認できる。

次いで「の嶺」の例を挙げる。

1 安達太良の嶺に伏す鹿猪のありつつも我れは至らむ寝処な去りそね (14・三四二八)

2 対馬の嶺は下雲あらなふ可牟の嶺にたなびく雲を見つつ偲はも (14・三五一六)

3 多胡の嶺に寄せ網延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに (14・三四一一)

4 富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり (3・三二〇)

5 富士の嶺を高め畏み天雲もい行きはばかりたなびくものを (3・三二一)

6 富士の嶺のいや遠長き山道をも妹がりとへばけによばず来ぬ (14・三三五六)

が見える。このうち、2に読み込まれた「対馬の嶺」以外はすべて東国の山である。右にも畿内の歌はないことが確認できる。このほかに「ネ」に形容が加わって「シラネ」となった例が一例ある。これもやはり東国の歌の例である。

7 遠しとふ故奈の白嶺に逢ほしだも逢はのへしだも汝にこそ寄せされ (14・三四七八)

さらに、東国に限られる形の「ネラ」「ネロ」の例がある。「ネラ」は、8 我妹子と二人我が見しうち寄する駿河の嶺らは恋しくめあるか (20・四三四五)

の一例。「ネロ」は、

「箱根の嶺ろ」 一例 (14・三三七〇)

「馬来田の嶺ろ」 二例 (14・三三八二、14・三三八八)

「小筑波の嶺ろ」 一例 (14・三三九五)

「久路保の嶺ろ」 一例 (14・三四一二)

「伊香保の嶺ろ」 一例 (三四二三)

があり、「の」を介さない例に、

「小筑波嶺ろ」 一例 (14・三三九四)

がある。地名以外の形容と結びついた例には、

「青嶺ろ」 二例 (14・三五一一、14・三五一二)

「一嶺ろ」 一例 (14・三五一二)

がみとめられる。「青嶺ろ」のように固有の山の名を指したものでない場合も含めて、文脈から見てすべて東国の山を詠んだものと判断できる。

かくして、天智天皇の一首を「大島のネ」と訓むとすると、畿内の山をさして「ネ」と称した唯一の例ということになる。山の山頂付近をさして「ネ」ということは東国の歌に限られるし、山の名としての「ネ」「ノネ」という言い方も万葉時代には畿内には見られなくなっていたといっているのではないだろうか。

その場合、畿内ではどういう言い方が一般であったかといえば、『時代別国語大辞典 上代編』が指摘するように「ミネ」という語が一般化していたのだと思われる。同様な分布を示す語に「タカネ」がある。まず「ミネ」について確認しておく。山頂付近をさす一般名詞としての例には、

「青山の峰の白雲」 (3・三七七)

「吉野の山の峰にたなびく」(3・四二九)

「奈良山の峰の黄葉」(8・一五八五)

「高松のこの峰も狭に」(10・二二三三)

「奈良山の峰なほ霧らふ」(10・二三一六)

「有乳山峰の沫雪」(10・二三三一)

「高山の峰の白雲」(10・二三三二)

「和射見の峰行き過ぎて」(10・二三四八)

「高山の峰の朝霧」(11・二四五五)

「高山の峰行くししの」(11・二四九三)

「この山の峰に近しと」(11・二六七二)

「谷狭み峰辺に延へる」(12・三〇六七)

「高山の峰のたをりに」(13・三二七八)

「相模嶺の小峰見そくし」(14・三三六二)

「武蔵嶺の小峰見隠し」(14・三三六二の或本歌)

「谷狭み峰に延ひたる」(14・三五〇七)

「峰高み谷を深みと」(17・四〇〇三)

「足柄の峰延ほ雲を」(20・四四二一)

などがある。畿内の歌に多いが、巻十四の「東歌」にも見えることが確認されよう。一方、固有の山名に結びついて用いられた例には次のようなものがある。

a み吉野の 耳我の峰に 時なくぞ 雪は降りける 間なくぞ  
雨は降りける その雪の時なきがごと その雨の 間なきが  
ごと 隈もおちず 思ひつつぞ来し その山道を (1・二五、

天武天皇)

b 妹らがり今木の峰に 茂り立つ 嬌松の木は 古人見けむ (9・  
一七九五)

a には、「或本の歌」が載せられており、そちらでは「み吉野の耳我の山に」とうたい起こされている。これは同じ山を指したものである。つまり、山頂部分に注目しつつ一つの山の名のつもりで「耳我の峰」と称したものと思われる。それに対して次の例は山の頂上部分の一つの峰を指してであろう。

c 白雲の 龍田の山の 瀧の上の 小椋の峰に 咲きををる

桜の花は (9・一七四七)

ただし、これも、龍田の山並みの中の、その「小椋の峰」ということであれば、山頂に注目した一つの山の名と見ることもできる。また、右の一般名詞に挙げた例の中で、

和射見の峰行き過ぎて 降る雪のいとひもなしと申せその子に  
(10・二三四八)

の場合は、歌の表現としては初句四音であって固有の山名ではないと思われるが、実際としては「ワザミのミネ」という山の名として定着していたことも考えられる。なお、「ミネ」には助詞「の」を介さずに地名と結びついた例は見られない。これらからすると、万葉のころの状況としては「ネ」よりも「ミネ」の方が一般的に用いられていたと言える。これは同様の語構成と思われる「チ(ヂ)」と「ミチ」(道)の場合にも言える。「チ」は万葉歌では単独で用いられることはなく、常に複合語の中に見られ、一般的な名詞としては「ミチ」が用いられ

ている。助詞「の」を介さずに地名と結びつくのは「チ(ヂ)」および「ネ」で、「ミチ」「ミネ」にはそういう例が見えないという点も共通する。

なお、巻五には「高山之嶺」「領巾磨之嶺」(5・八七一の漢文序)という例も見える。これは漢文の中の例で訓読の際に「ネ」と読むべきか「ミネ」とすべきか両様考えられる。対応する歌には「山(やま)」「岳(たけ)」は出てくるが「ミネ」「ネ」ともに見えず、漢文序なので「ネ」「ミネ」の詮索とは無縁かもしれないが、訓読するとすれば、「高山之嶺」が手がかりになる。上記の例から分かるように万葉歌には「ヤマのネ」の例がなく「ヤマのミネ」ばかりであることから、「高山のミネ」あるいは「高き山のミネ」とよむのが自然である。したがって、「領巾磨之嶺」も「領巾振りのミネ」でよいだろう(『肥前国風土記』松浦郡には「褶振峰」とある)。

続いて「タカネ」であるが、単独で用いられたのは「嶺」の例として前にも掲げた次の一例のみである。

高き嶺に雲のつくす我れさへに君につきなな高嶺と思ひて  
(14・三五一四)

この他は、ほとんどが富士の例で、

「富士の高嶺」 八例(3・三一七、三一八、三一九、11・二六九五、11・二六九七、二六九七の或本歌、14・三三五八、三三五八の一本歌)

「伊予の高嶺」 一例(3・三三二)

「伊豆の高嶺」 一例(14・三三五八の或本歌)

「生駒高嶺」 一例(20・四三八〇)

といった状況である。「タカネ」は、富士山の例が多いので東国に用例が集中するのだが、一例とはいえ、「生駒高嶺」の例のあることが注目される。

「ネ」「ミネ」という語の使用状況をまとめると、「ネ」は畿内には例がなく、「ミネ」は畿内にもそれ以外の地にも例が見えるということになる。

### 三、「大島嶺」と「大和島根」

以上に述べたような状況を、天智天皇の一首における「大島嶺」の「嶺」に当てはめると、これも畿内の地の山をさしての称としては「ミネ」と訓む方が穏やかということになるであろう。『万葉集童蒙抄』の改訓は見直されるべきではないか。だが、「大島嶺爾」を「オホシマのミネに」と訓ずると、字余りの句になる。かといって旧訓に復し「オホシマミネに」とすると、「オホシマ」という地名、または山名に直接「ミネ」が下接することになって、先の掲げた『万葉集講義』が「古なりしもの」と推定したようにこれも例がない。ただ、注目されるのは、「生駒高嶺」(20・四三八〇)という語構成である。「生駒高嶺」の「タカ・ネ」は「ミ・ネ」と同じく「ネ」に尊称の「タカ」が接したものと考えられる。そこで「生駒・タカ・ネ」という語のつながりと同様に「大島・ミ・ネ」という語のつながりが存しても不自然ではないと推定できる。だが、それにしても固有の名に「ミネ」が接する例がないことは大きな問題点といえるだろう。

となると、「オホ」＋「シマ・ミネ」という構成も考えてみるべきだろう。つまり、「大島」を一つの名とは見ずに、「島峰（シマ・ミネ）」という語に「大」が接したものと考えるのである。先に掲げた渡瀬昌忠氏「鏡皇女―高安山相聞」の発言に再度注目したい。渡瀬論は「大島の嶺」を高安山と見るのだが、「大和なる大島」を、西方海上から見る大和の「大島」とし、「その『嶺』は海上に浮かぶ大きな島山のような生駒・葛城の連峰であり、高安山はその中央の一嶺である」と述べる。生駒・葛城の連峰を「大島」と見、その中の一つの峰を「嶺」と称したという考えである。これまで述べてきた点を考慮すると「ネ」を単独で用いるのは、東歌に限られるので、ここは「ミネ」でありたいところである。が、この「大きな島山」という捉え方は基本的に正しいのではないだろうか。つまり、「大島嶺」は「大・シマミネ」なのではないだろうか。

ただし、この場合においても、『万葉集』には「シマヤマ」という語はあるが、「シマミネ」という語の例がないという問題点を抱えている。「島山」は、『万葉集』に十例を見る。

- 1 すめろきの 神のことごと 敷きいます 国のことごと 湯はしも さはにあれども 島山の 宜しき国と こごしかも 伊予の高嶺の 射狭庭の 岡に立たして…(3・三三二、山部赤人)
- 2 やすみし我ご大君の 常宮と 仕へ奉れる 雑賀野ゆそがひに見ゆる 沖つ島清き渚に 風吹けば 白波騒き 潮干れば 玉藻刈りつつ 神代よりしかぞ 貴き玉津島山 (6・九一七、山部赤人)
- 3 島山を い行き廻れる 川沿ひの 岡辺の道ゆ 昨日こそ 我

が越え来しか 一夜のみ 寝たりしからに 峰の上の 桜の花は 滝の瀬ゆ 散らひて流る…(9・一七五一、高橋虫麻呂歌集)

4 道の後深津島山しましくも 君が目見ねば 苦しかりけり (11・二四二三)

5 近江の海沖つ島山奥まけて 我が思ふ妹を言の繁く (11・二四三九)

6 近江の海沖つ島山奥まへて 我が思ふ妹が言の繁く (11・二七二八)

7 玉かつま安倍島山の夕露に 旅寝えせめや 長きこの夜を (12・三一五二)

8 鳥総立て 舟木伐るといふ 能登の島山 今日見れば 木立茂しも 幾代神びぞ (17・四〇二六、大伴家持)

9 豊の宴 見す今日の日は ものふの 八十伴の男の 島山に 赤る橘 うずに刺し 紐解き放けて 千年寿き 寿き響も

し ゑらゑらに 仕へまつるを 見るが 貴さ (19・四二六六、大伴家持)

10 島山に照れる橘うずに 刺し仕へまつるは 卿大夫たち (19・四二七六、藤原八束)

右の1・2・4・5・6・7は、「海」の向こうに浮かぶ島を指しての例である。3は龍田越えの「島山」で、山すそに川を廻らせた、その向こう側の山を指す例である。また、9、10の例は庭園の中の「島山」の例である。全体として、水を隔てとして、その向こう側に見える山並みを「島山」と称しているということができよう。



先に、「耳我の山」「耳我の峰」の例で述べたように、もともと「山」と「峰」とは近い関係にある語である。『肥前国風土記』(彼杵郡)には「落石の岑」について「郡の以北の山なり」と注を付している。『常陸国風土記』(久慈郡)には「東の大きな山を、賀毘礼の高峰と謂ふ」とある。「ミネ」と「ヤマ」とは、語として相互に交換可能であったようだ。『豊後国風土記』直入郡の「救覃峰」は、『万葉集』には、

朽網山(原文同じ)夕居る雲の薄れゆかば我は恋ひむな君が目を欲り(11・二六七四)

と詠まれ、同国速水郡の「柚富峰」は、

娘子らが放りの髪を由布の山(原文「木綿山」)雲なたなびき家のあたり見む(7・二二四四)

と見える。これらの例を参考にすれば、「シマヤマ」の類語としての「シマミネ」という語は十分に存在しえたと考えられる。つまり「オホシマミネ」は「オホシマヤマ」というに近い語であったのではないか。その場合、なぜ「オホシマヤマ」とうたわなかったかといえ、これは、歌が、山頂に家があれば遠くからでも見ることができるといいう内容であるためであろう。「山」では、山腹も山裾も含まれてしまう。ここは大きな島のように見える「ミネ」の「家」でなければならなかった。

かくして、「大和なる大島嶺」は、「大和にある、大きな島のようにみえる『峰』」という意味であったと考えられる。すなわち、「大和にある」「大島」という名の「ネ」ではないのであろう。これは生駒山などの山塊を西方から見ての呼称である「大和島」とほぼ同じ内容を持つ語

と見てよいだろう。これまでの論述は「大島」を地名と見ない点では渡瀬論に近く、上田秋成『万葉集櫛の柚』に「大和なる大島嶺とは大和島嶺と云を延して詞章はなす也」というのに近い。

#### 四、「家」を見ること

このような見方によれば、近江京時代の作と見る説よりも、難波宮の皇太子時代の作という説が有力になる。ただ、西の難波宮から、東にそびえる生駒山などの山並みを見て「大島(おおしま)嶺(みね)」と言ったと断言するには、やや不安がある。それは「大和島」が、難波よりもさらに西の明石海峡付近のから海をへだてて見た山塊をさして詠まれることが多く、難波宮からの例がないからである。「大和島」は、『万葉集』の中に次のような例を見る。

ア天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ一本には「家のあたり見ゆ」といふ。(3・二五五、柿本人麻呂)

イ名ぐはしき印南の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は(3・

三〇三、柿本人麻呂)

ウ越の海の角鹿の浜ゆ大船に真楫貫き下ろし鯨魚取り海道に出でて喘きつつ我が漕ぎ行けばますらをの手結が浦に海女娘子塩焼く煙草枕旅にしあればひとりして見る験なみ海神の手に巻かしたる玉たすき懸けて偲ひつ大和島根を(3・三六六、笠金村)

エ天離る鄙の長道を恋ひ来れば明石の門より家のあたり見ゆ柿本朝臣人麻呂が歌には「大和島見ゆ」といふ。(15・三六〇八)

才海原の沖辺に灯し漁る火は明かして灯せ大和島見む（15・三六  
四八、遣新羅使人）

かいざ子どもたはわざなせそ天地の堅めし国ぞ大和島根は（20・  
四四八七、藤原仲麻呂）

また、『風土記』に次の例を見る。

キ朝日は淡路の島を蔭し、夕日は大倭嶋根を蔭しき。（逸文『播磨  
国風土記』明石の駅家）

右のうち、ウは日本海における歌詠であるから、現在の生駒山塊を指  
しての例ではない。越前へ向けて北への航路だから、南に見える本州  
の山並みを見やりつつ故郷大和を偲んで「大和島根」と称した例であ  
ろう。また、カは日本国を指して言った例である。この二例以外はす  
べて瀬戸内海での歌で、瀬戸内から東に見える生駒山などの山並みを  
目して「大和島根」と称している。ア・イは柿本人麻呂の例で、エは  
遣新羅使人が朗誦した古歌である。アとエは明石海峡付近から東の生  
駒山から葛城山の山塊を見たもの、イはさらに西の印南からの例であ  
る。オは同じ瀬戸内海でもかなり西の豊前国の分間の浦における詠で  
ある。実際に見えることを期待しての詠ではなく、望郷の念の表出で  
あろう。これも、念頭にあったのは大和の山並みであろう。こうして  
見ると、瀬戸内海に限れば「大和島根」は明石海峡より以西の地で、  
故郷大和の山並みを望郷の念をこめて呼んだ称といえることができる。

これらの「大和島根」と実質的には同じことを表現したと考えられ  
る「大和なる大島嶺」についても、かなりの距離感を伴って用いられ  
る性格の語なのではないかと考えられる。さらに、「島山」の類語とし

ての「島嶺<sup>みね</sup>」を考える場合、水を挟んで向こうの「島」という印象が  
決定的になる。

とすると、この歌にうたわれているのは難波宮よりもさらに西にあ  
つての感慨と見るべきかもしれない。そう考えてみると、この歌が鏡  
王女の「家」を見たいというたうものである点が大きな意味をもつよう  
に思われる。「家」を「見る」、あるいは「家」を「見たい」という発  
想は旅中の歌に多い。「家」を「見る」ことをよむ歌を次に掲げる。

a 妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島嶺に家もあらましを 一  
には「妹があたり継ぎても見むに」といふ。 一には「家居ら  
ましを」といふ（2・九一）

b 燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず  
（3・二五四）

c 天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ 一本に  
は「家のあたり見ゆ」といふ（3・二五五）

d 臣の女の櫛笥に乗れる鏡なす御津の浜辺にさ丹つらふ紐解  
き放けず我妹子に恋ひつつ居れば明け暮れの朝霧隠り鳴く  
鶴の音のみし泣かゆ我が恋ふる千重の一重も慰もる心もあ  
りやと家のあたり我が立ち見れば青旗の塋城山にたなびけ  
る白雲隠る天さがる鄙の国辺に直向ふ淡路を過ぎ粟島を  
そがひに見つつ朝なぎに水手の声呼び夕なぎに楫の音しつ  
つ波の上をい行きさぐくみ岩の間をい行き廻り稲日都麻浦  
廻を過ぎて鳥じものなづさひ行けば家の島荒磯の上にうち  
靡き繁に生ひたるなのりそがなども妹に告らず来にけむ

(4・五〇九)

e あぢさはふ 妹が目離れて 敷栲の 枕もまかず 桜皮巻き 作れる  
船に 真楫貫き 我が漕ぎ来れば 淡路の 野島も過ぎ 印南婦 辛荷  
の島の 島の際ゆ 我家を見れば 青山の そことも見え 白雲も  
千重になり来ぬ 漕ぎ廻むる 浦のことごと 行き隠る 島の崎々  
隈も置かず 思ひぞ我が来る 旅の日長み (6・九四二)

(7・一二四四)

f 娘子らが放りの髪を由布の山雲なたなびき家のあたり見む

(一七四〇)

g 後つひに命死にける 水江の浦島の子が家とこ見ゆ (9・

一七四〇)

h 浅茅原茅生に足踏み心ぐみ我が思ふ子らが家のあたり見つ 一

(15・三六〇八)

右のうち、b、e および i の例が旅におけるものであることはそれぞ  
れの歌の表現から明らかであろう。f は、巻七の「羈旅作」の中の一  
首であり、これも旅における例であることが確定である。g は、高  
橋虫麻呂の詠で、「水江の浦の島子を詠む一首」の例。この時、虫麻呂  
は家郷大和から難波に出かけてきているわけだが、見ているのは島子  
の家であって、望郷の対象となる「家」ではない。したがって、これ  
は旅の例ではない。h は「寄物陳思」の一首。表現からは旅における  
詠とも十分に読めるが、断言できない。例外としておくべきだろう。  
こうした例外はあるにしても、「家」を「見る」ことが意識に上るのは、

「旅」においてこそ自然であることがわかるだろう。a としてあげた  
天智天皇の一首も、明石以西への旅を意識しての歌とみることができ  
るのではないだろうか。

そのとき、すぐに連想されるのが、次の歌である。

中大兄近江の宮に天の下知らしめす天皇の三山の歌

香具山は 畝傍を惜しと 耳成と 相争ひき 神代より かくに  
あるらし 古も しかにあれこそ うつせみも 妻を争ふらしき  
(1・一三)

反歌

香具山と耳成山と闘ひし時立ちて見に來し印南国原 (1・二四)

海神の豊旗雲に入日さし今夜の月夜さやくありこそ (1・一五)

この歌は、長歌は大和の三山を詠み、反歌第一首は播磨の「印南国原」  
をうたい、反歌第二首は「三山」に関わらないという、相互の関連に  
疑問の持たれる長反歌であるのだが、『万葉集講義』が、

この御詠は中大兄まだ皇太子にておはしまさぬ時播磨国にいでま  
し印南の地にてこの伝説をきこしめし、甚だ面白きことをききつ  
るよと思し召し、はるかにかの日常目馴れたまひし三山を思ひや  
りたまひてこの御詠ありしならむ。

と述べて以来、印南の地での詠という理解がなされるようになった。  
つまり、長歌は「印南国原」を眼前にして、当地にゆかりの三山の伝  
説を詠むことで異郷への礼をつくしたものであり、第二反歌は、旅の  
安全を祈る心情が表立ててうたわれたものであるという繋がりが認め  
られる。これは従うべき考察と考えられる。この歌の存在によると、

天智天皇は「印南」のあたりに出かけたことがあることになる。その折と同じかどうかは不明ながら、天智天皇（当時皇太子）は斉明天皇の七年春正月に、百済救援の軍勢を率いて瀬戸内を西航している。どの折と確定することは難しいけれども、天智天皇と瀬戸内海とは無縁ではないことが知られる。そこで、天智天皇が、何らかの折に瀬戸内海を西に向けて出かける際に難波宮あたりで詠んだのが、「妹が家も継ぎて見ましを」の一首であったとは考えられないだろうか。

「継ぎて見ましを」は、今日ばかりでなく、明日もその次も続けて見続けたいという意である。旅においては、家郷を連日目にすることなどかなうはずもないが、あの高い峰の上に家があれば、それが可能になると発想したところに、この一首の眼目があるのではないだろうか。「大和なる大島嶺に」という表現からは、作者は「大和」の外にあり、鏡王女は「大和」に居住する存在と意識されていたものと考えられる。そこで、天智天皇（中大兄皇太子）が二人の間を隔てる生駒・葛城の山並みを目にしつつ「その山頂に家があれば」と仮想したものと理解することができる。「大和島根」をうたう歌に明石以西の作が多いことから、この歌も、明石以西での作と考えられるけれども、作歌の地点として難波宮を除外するまでには至らない。ただし、難波宮に居住する皇太子時代の作というのも、一つの推定に過ぎないことに注意したい。歌の表現からいえることは、この歌が「大和」を離れての作であるという点であり、仮に難波宮時代の歌であるとしても、難波宮を日常居住する「家」と意識しての作ではないであろうということである。

「家もあらましを」という仮想は、むろん次善の願望であって、あなた自身に毎日会いたいというのが本来の願望であろう。その願望を実現するとき、なぜ「家だけでも見たい」という形の仮想をとったのであろうか。「せめて家が見たい」という仮想が生まれる場合としては、作者が「旅」に身を置いているという意識を持つ時が一番自然であるように思われる。旅によって逢えないという事情を導入すると、一首は理解がしやすくなる。山の上に「家」という発想は、「そうすれば、どんなに離れてもずっと見ていられるから」という理由から生まれたものと推測できる。

この歌には、鏡王女が次のように答えている。

#### 鏡王女、和へ奉る御歌一首

秋山の木の下隠りゆく水の我れこそ増さめ思ほすよりは（2・九二）

鏡王女の歌は、旅の別れを意識したものと断定するに足る表現を持たないのだが、家郷で待つ私のほうが、一層強くあなたのことを思っていますという歌の内容は、旅立ちに際して贈られた歌とみても不都合はない。季節は秋ということになれば、斉明七年春正月の西征時とは別の折の贈答ということになる。

#### 五、まとめ

天智天皇の一首は、旅立ちに際して、あなたの家をずっと見ていたものだとうたったものであると推定される。しかし、この解釈には、一つ難点がある。天智天皇の歌には二箇所にわたって異文の注記が施

されている。その異文をたどってできる歌は次の通り。

妹があたり継ぎても見むに大和なる大島嶺に家居らましを

問題となるのは結句である。沢瀉久孝氏「『家もあらましを』と『家居らましを』」「『万葉古径』」の指摘するように、「家居る」は自らのことにも、他人のことにも言うので、本文歌と同じように「あなたが『家居らましを』と理解しうる余地もないわけではない。だが、異文歌は段落のない一文の歌となっている。この「家居らましを」は沢瀉論の言うように主語は作者であると考えるのが素直である。となると「妹があたり」を見るために自分が「大島嶺」に「家」を持つとういうことになって、異文の歌については、天智天皇の旅に関わる歌であるという推定はなりたにくい。

本文と異文との関係は、一概には決定できない面がある。本文歌の伝承の過程で異文が生じたとも、異文が最初に成り立ち、のちに本文がなったとも考えられる。また、異文の結句「家居らましを」も主格は「あなたが」のつもりであり、その点に表現の熟さなことを感じて本文歌のように改作したとも考えられなくはない。そこで、本文歌の解釈にかぎって考えられるところを述べてきた次第である。

以上、「山跡有大島嶺爾」は「大和なるオホシマミネに」と訓む旧訓に復すのが穏当であり、その「大和なる大島嶺」は「大和にある大きな島のように海上に浮かぶ嶺」の意と思われることを述べた。その作歌事情としては、天智天皇の瀬戸内海西行に関わったの詠かと推定される。

注

(1) 『日本書紀』の状況を『日本古典文学大系 日本書紀』と『新編日本古典文学全集 日本書紀』の訓を添えて掲出する。まず「峰」は、

「鳥上之峰」神代上第八段一書第四（大系・新全集ともにタケ）

「熊成峰」神代上第八段一書第五（大系・新全集ともにタケ）。

「日向襲之高千穂峰」神代下第九段本文（大系・新全集ともにタケ）

「筑紫日向高千穂触之峰」神代下第九段一書第一（大系・新全集ともにタケ）

「日向穗日高千穂之峰」神代下第九段一書第二（大系・新全集ともにタケ）

「日向襲之高千穂穗日二上峰」神代下第九段一書第四（大系・新全集ともにタケ）

「日向襲之高千穂添山峰」神代下第九段一書第六（大系・新全集ともにタケ）

という状況である。一方、「嶺」の字の例は以下の通り。

「葛城嶺」齐明天皇元年五月一日（大系・新全集ともにタケ）

「住吉松嶺」齐明天皇元年五月一日（大系・新全集ともにミネ）

「田身嶺」齐明天皇二年是歳条（大系・新全集ともにミネ）

「高安嶺」天智天皇八年八月三日（大系はタケ、新全集はミネ）

「多武嶺」持統天皇七年九月五日（大系・新全集ともにミネ）

(2) 『風土記』における「ネ」の確例としては、『常陸国風土記』筑波

郡（新全集本三六二頁）の歌謡に「筑波嶺に逢はむと言ひし子は誰が言聞けばか嶺逢はずけむ（都久波尼<sup>ニ</sup>尔阿波牟等伊比志古波多賀己等岐氣波加弥尼阿波須氣牟）」「筑波嶺に廬りて妻なしに我が寝む夜ろははやも明けぬかも（都久波尼<sup>ニ</sup>尔）」とある。連動して本文の「筑波峰」も「つくはね」と訓ずるべきだろう。これ以外は「峰」「峯」「嶺」「岑」などと書かれ、「ミネ」と訓むべきか「ネ」と訓むべきか不明な例ばかりである。以下、『新編日本文学全集 風土記』によって訓を添えて例のみを記す。

播磨国風土記 「稻春岑いねつきのみね」 宍禾郡

「三坂岑みさかのみね」 美囊郡

出雲国風土記 「林垣峰はやしがきのみね」 意宇郡

「玉峰山たまみねやま」「玉峰たまみね」 仁多郡

豊後国風土記 「救覃峰くたみのみね」 直入郡

「袖富峰ゆふのみね」 速水郡

「頸峰くびのみね」 速水郡

肥前国風土記 「朝来名峰あさくなのみね」 肥後国益城郡の山

「褶振峰ひれふりのみね」 松浦郡

「託羅之峰たらのみね」 藤津郡

「落石岑おちいしのみね」 彼杵郡

「高来峰たかくのみね」 高来郡

「峰湯泉みねのゆのいづみ」 高来郡

常陸国風土記 「筑波岳つくはね黒雲挂衣袖漬」 常陸総記

「筑波岳つくはのやま」 筑波郡

「都久波尼つくはね」 筑波郡

「筑波峰つくはね」 筑波郡

（なお、茨城郡に「筑波山つくはやま」「筑波之山つくはのやま」の例、行方郡に「小筑波之岳をつくはのやま」の例あり）

「二所之峰ふたがみのみね」 久慈郡

「賀毘礼之高峰かびれのたかみね」 久慈郡

「賀毘礼之峰かびれのみね」 久慈郡

逸文山城国

「曾之峰そのたけ」 葛木山之峰かつらぎやまのみね

前田家本『釈日本紀』

逸文播磨国

「藤代之峰ふぢしろのみね」 前田家本『釈日本紀』

逸文伊予国

「熊野岑くまのみね」 前田家本『釈日本紀』

逸文筑紫国

「吐濃峰とののみね」 韜馬ノ峰うしかのみね」 東博本

『塵囊』

逸文筑紫国

「穗生峰くしぶのみね」 東博本『塵囊』

逸文肥後国

「朝来名峰あさくなのを」 前田家本『釈日本紀』

逸文日向国

「高千穂二上峰たちちほのふたがみのみね」 仁和寺本

『万葉集註釈』